

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

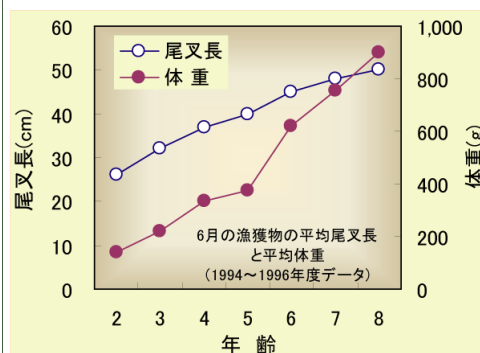
系群名 オホーツク海南部

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 4歳
産卵期・産卵場: 3～5月、北見大和堆～宗谷地方沿岸およびテルペニア(多来加)湾周辺
索餌期・索餌場: 初夏～秋季、オホーツク海
食性: オキアミ類、カラサス類、クラゲノミ類、ヨコエビ類をはじめとする小型甲殻類、その他イカ類、魚類など、本海域では周年魚類の割合が高い
捕食者: 不明

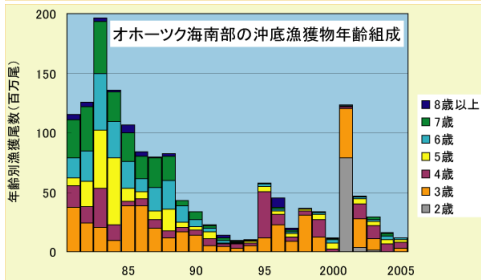
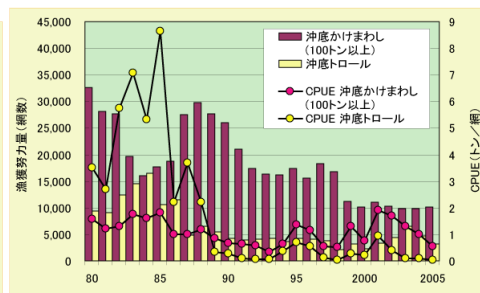
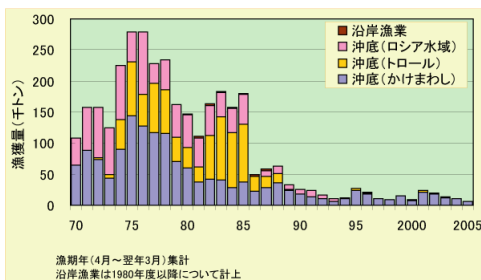


漁業の特徴

本海域で漁獲されるスケトウダラは、ほとんど全てが沖合底びき網(沖底)による。漁期は、流水の接岸期を除くほぼ周年にわたるが、近年では5、6月と12、1月に漁獲量が増加する傾向にある。沖底にはオッタートロール(トロール)とかけまわしがあり、1985年度まではトロールの漁獲が多かったが、それ以降は、漁獲量の大部分はかけまわしのものである。減船により現在の沖底の隻数は、1985年の1/4未満の16隻となっている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半までは100千トンを超えていたが、ソ連水域での漁獲規制の強化や減船により、1986年には半減した。その後、1989年度頃から漁獲の対象をズワイガニに変えたために、漁獲量は26千トンと大きく落ち込み、以後6千～27千トンの範囲で推移している。2005年度の漁獲量は6千トンであった。漁獲量は、漁期年(4月～翌年3月)で集計した。



資源評価法

日本漁船による漁獲量とCPUEの情報が、本海域に分布するスケトウダラには複数のグループが存在し、日ロの水域を回遊していると推定されており、日本水域で得られるこれらの情報が資源全体の状態を代表するものとは判断できない。また、ロシア水域における情報はほとんど得られていない。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本漁船による漁獲量とCPUE、年齢別漁獲尾数の推移などに基づいて、資源状態を推測した。

資源状態

調査船調査の結果、豊度が高いと推測された1999年級群の加入によって、沖底の漁獲量とCPUEは2001年度に上昇したが、その後、2002年度以降の漁獲量とCPUEは減少傾向を示した。1999年級群以降、豊度の高い年級群の加入情報はない。本海域における近年のかけまわしのCPUEは、漁獲量の多かった1980年代と同程度の値を示しているが、沖底の有漁漁区数は80%に減少しており、漁場の縮小が示唆されている。1980年度以降の漁獲量の変動範囲

と2005年度の漁獲量6千トンから、資源の水準は低いと判断した。資源の動向は、2001年度以降の漁獲量とCPUEの推移から減少と判断した。

管理方策

調査結果により、加入前から豊度が高いと推測されていた1999年級群の漁獲状況から、漁獲が資源に対して直接的な影響を与える可能性が示唆されており、漁獲の制御が資源状態の向上に効果をもたらすと考えられる。しかし漁獲量が過去の最大時の1割未満にまで減少し、加入に豊度の高い年級が見られない現状では、早急な資源の回復は難しいと考えられる。そのため、資源状態に応じた漁獲を継続しつつ豊度の高い加入を待ち、豊度の高い年級の加入情報が得られたら、その年級群を保護して資源状態を段階的に改善してゆくことを管理の方策とする。なお、ロシアは、サハリン東岸海域の2006年のTACを5千トンと設定して漁獲規制を実施している。



漁獲のシナリオ (管理基準)	管理の考え方	2007年漁獲量	F値	漁獲割合	評価
ABClimit (0.56C2005)	資源の動向に合わせた 漁獲の継続	3.1千トン	-	-	-
ABCtarget (0.8・0.56C2005)	上記の予防的措置	2.5千トン	-	-	-

資源評価のまとめ

- 隣接するロシア水域での漁獲状況が不明で、評価が困難
- 日本水域の状況から、資源は低水準、動向は減少傾向と判断
- 1999年級群以降、豊度の高い加入の情報はない

管理方策のまとめ

- 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要
- ロシア水域の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシアもTACを設定して漁獲規制を実施している（2006年東サハリン海域:5千トン）

資源評価は毎年更新されます。